

若者の発想が生み出した ワインツーリズム



—農的社會デザイン研究所代表・蔦谷栄—

11月5、6日と「ワインツーリズムやまなし」が開催され、山梨県内に点在するワイナリーにたくさんの人たちが押し寄せ、普段は静かな山あいにある町も一転、大いににぎわいを見せた。11月17日が今年のボジョレー・ヌーヴォーの解禁日だが、これに先だつ3日に山梨ヌーボーは解禁され、その直後の土日に、今年のワインツーリズムが設定された。

このイベントでは、参加者はワイナリーを巡る専用バスを利用して、自分が行きたいワイナリーを訪ねてテイスティングを楽しむ。今年で9回目となるが、年々情報は広がって、今年の参加人数は2000人を超え、ほぼ受け入れ能力の限界に達しているようだ。

県内59社のワイナリーが参加しており、山梨県内を二つのエリアに分けて、5日は甲州市・山梨市地域で、6日は甲府市・笛吹市・甲斐市地域で実施された。甲州市・山梨市地域の場合、JR中央線にある勝沼ブドウ郷駅、塩山駅、山梨市駅を起点・終点にしてバスが最寄りの幾つかのワイナリーを循環し、参加者は好みのワイナリーで降りてテイスティングをした後、次に来たバスに乗り、さらにその先にあるワイナリーをはしごすることができる。また時間内であればいったん終点の駅に戻ってJRに乗り、別の駅まで行き、他のコースを回ることも可能だ。参加費は5000円（税別）で、2日間にわたり両地域で使用できるバス利用パスを購入する。その際、ワイングラスとグラスホルダー、ガイドブックが渡される。参加費とテイスティングの料金は別で、ワイナリーによって無料、有料のテイスティングが用意されている。

山梨のワインは生産量全国一だ。生き残りを品質勝負にかけており、首都圏はもちろんのこと、中京、関西からの参加者も多く、沖縄など、より遠隔地から足を運んでくる人も珍しくない。また参加者の年齢層も老若男女と多様だが、夫婦連れよりも、30代から50前後ぐらいまでの女性グループが目につく。ワインツーリズムで自



ワイナリーにツアーバスが到着するとテイスティング目的の人たちがどっと降りる

分の気に入ったワイナリーを見つけ、後日、訪れてワインを購入してだけでなく、ブドウの収穫をはじめとする作業の手伝い等をしたりしながら、ワインの原料やテロワール（その土地の環境全体）まで含めて勉強していく人も少なくないという。

このワインツーリズムは、ワイナリーの若手経営者らが発案・企画し、運営している。また土日でエリアを分けているのは、両地域のスタッフが別のエリアでの開催も支援するためでもある。行政が絡んだ地域連携は実際にはなかなか難しいが、民間は自力でやるからこそ軽々と地域の枠を超えて行うことが可能だ。何よりも一つのワイナリーだけでは生き残れない、多数のライバルとなるワイナリー、そして地域が切磋琢磨（せつさたくま）して品質を磨きながら、県全体のレベルをあげ、生き残りをかけている。そしてこうした取り組みに魅かれて首都圏だけでなく全国から人が集まってくる。地域としての魅力づくりは、行政に依存するよりも独自に自分たちの力を出し合ってやることで、自由に、かつ効率的にできることもある。ワインツーリズムの取り組みが示唆するところは大きい。

<表紙・目次へもどる>



蔦谷 栄一（つたや えいいち）

東北大学経済学部卒業、1971年農林中央金庫入行、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長、常務取締役、特別理事などを経て、現在、農的社會デザイン研究所代表

〔主な著書〕

「地域からの農業再興」「共生と提携のコミュニティ農業へ」（以上創森社）「日本農業のグランドデザイン」（農山漁村文化協会）「農的社會をひらく」（創森社）など